

いにしえ湖南ものがたり

まつばらたなか いせき 松原田中遺跡

木製の鍬（くわ）が見つかる！（1区）

弥生時代前期（約2500年前）の溝から、鍬の先がみつかりました。ただし、柄を装着するための穴が開いていないことから、製作途中のものであると考えられています。

木製鍬としては、鳥取県の最古例であるとともに、製作方法や木材の加工技術を知る上で、きわめて貴重な発見です。



区画溝を掘る（2区）



調査区の西側では、南北に延びる弥生時代中期（約2100年前）頃の溝がみつかりました。この溝を境に西側は土地が低くなり、田んぼが広がる一方、東側は少し高くなっています。そこには建物の柱穴が無数に見つかったことから、住居などが建つ人々の居住域であり、溝はそうした居住域と田んぼとを区切るものであったと考えられています。

また溝は、埋まっては掘り返すということを何度か繰り返していますが、東側より西側のほうが新しいことがわかりました。つまり、時代が新しくなるにつれ、居住域が少しずつ広がっていったと考えられます。



鳥取西道路の

遺跡を掘る！

第20号 2010年12月20日

遺跡からみつかるのは、住居のあとや土器ばかりではありません。目には見えませんが、植物の花粉などが地中に残っていることがあります。こうした微細な遺物は昔の環境を物語るくれる大事な情報です。

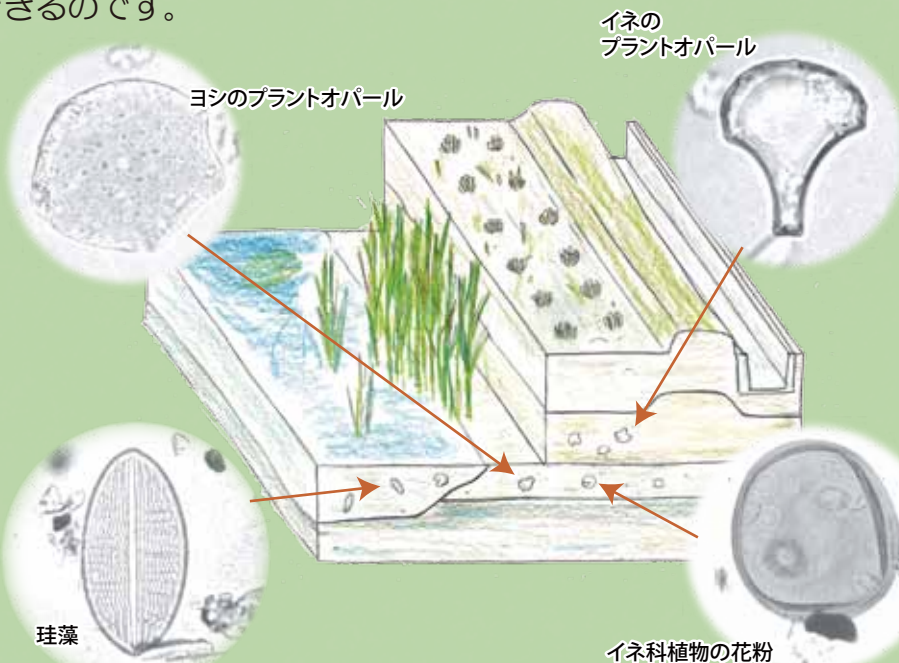


古代の環境を探る

土の中には当時生えていた花の花粉やイネ科の植物に含まれるガラス質の成分（プラントオパール）、プランクトンの一種である珪藻（けいそう）の化石が残っていることがあります。花粉やプラントオパールは植物の種類によって形が違い、珪藻は水の流れなど環境によって生息する種類が異なっています。そのため、それらの種類を調べることで、周辺の環境を復元することができるのです。

たとえば、水辺に生える植物の花粉やプラントオパールが多く、流れの弱い水に生息する珪藻が見つかる場所は、湿地だったと考えられます。また、イネのプラントオパールが多くみつかれば、田んぼだったと考えられます。

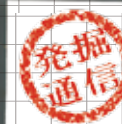
時代の違う地層ごとにむかしの環境を調べていくと、遺跡やその周辺の環境が人の暮らしとともに、どのように変化してきたのかがわかってきます。



（財）鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所

〒680-1133
鳥取市源太 12 番地
（旧鳥取湖陵高校美和分校内）

TEL：0857-51-7553
FAX：0857-51-7550
メールアドレス：
matsuk@pref.tottori.jp



高住平田遺跡の発掘調査が終了しました！

12月4日に行った松原田中遺跡の現地説明会は、晴天に恵まれ、95名の方にご参加いただきました。多くの方のご参加お礼申し上げます。

先月で高住平田遺跡は発掘調査が終了しました。今後は事務所です出土した遺物などの整理を進めていきます。整理の中で分かったことはホームページや通信でお知らせしていきます。

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

埋もれた太古のくらし

もとだかゆみのき いせき

本高弓ノ木遺跡



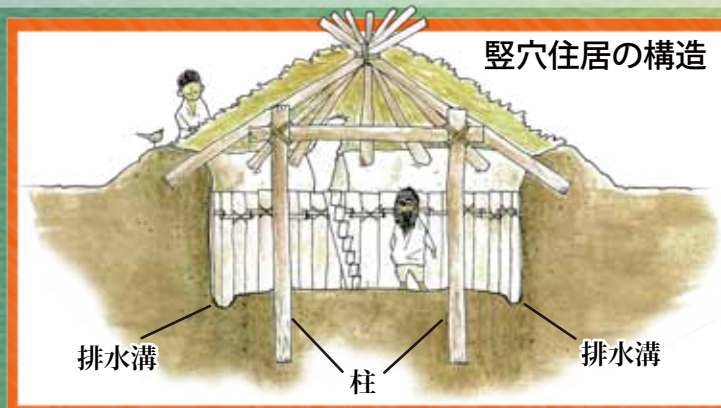
弥生時代中期の住居跡



復元竪穴住居(国史跡 妻木晩田遺跡)

調査地北端で、弥生時代中期(約2200年前)の竪穴住居の跡がみつかりました。弥生時代の人たちは、地面に丸や四角形の大きな穴を掘り、床に柱を立ち上げて屋根を組んでいました。また、地面を掘るので、湿気を抜いたり、排水を目的とした浅い溝を壁にそって掘っていました。

この竪穴住居は、後の時代の水田耕作によって壁が全て削られていましたが、床の部分から5つの柱穴と壁際に掘られた溝の一部がみつかりました。柱の穴はほぼ等間隔に並んでおり、もとは円錐形をした建物があったと考えられます。



竪穴住居の構造

排水溝

柱

排水溝

遺跡内からは、弥生時代中期の水路や土器、木器などが数多くみつっていますが、実際に人が住んでいた場所は、よくわかりませんでした。今回の発見から、調査地北端あたりが、当時の人々の居住域であったと考えられます。

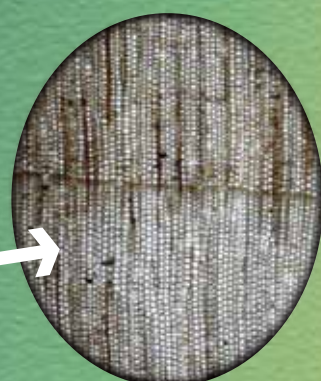
この木何の木?

本高弓ノ木遺跡の発掘調査では、昔の人たちがどのような木を使っていたのかを調べるために、出土した木材の一部を切りとって持ち帰っています。

木の種類を特定するためには、木の繊維を顕微鏡による観察が必要です。そのため、カミソリで薄くそいで、観察用の「試料」を作成します。その作業はまるで理科の実験のようです。



顕微鏡で観察するために光が透けるほど薄くそいだ木材は、まるで、カツオブシのようです。



木の繊維は種類によって違います。これは「イヌガヤ」という木です。

今、作業しているのは、古墳時代前期(約1600年前)につくられた構造物に使用されていた木材です。木の種類を調べることで、当時の木材の利用方法や、遺跡周辺の環境が明らかになります。

池のほとりに住んだ人々

たかずみひらた いせき

高住平田遺跡



今年度の現地調査が終了!

11月中ごろまで行っていた2区に続き、1区での今年度の調査が終わりました。ここでは、2区でみつかった2本の川の続きを確認することができました。

古代の川(12河川)では、2区と同じように、川底からほとんど割れていない土器などが出土しました。

また、12河川が埋まった後、これを横切って蛇行するように中世の川(2河川)がみつかりました。川の中からは、江戸時代初めごろ(約400年前)の陶器の破片が出土しており、そのころまでは水が流れていたと考えています。



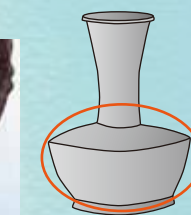
12河川

2河川

1区を西側からみたようす

川の東側では、遺構がみつかりませんでした。

高住地区では、昭和50年代に水田を整備する工事が行われました。このときに、地面を平らに削られたため、遺構が失われたと思われます。



壺の復元図
丸で囲ったところが出土した部分

12河川からは、当時の人たちが使っていた椀や皿、甕(かめ)など、さまざまな土器がみつかりました。

この川底を掘っていると、大きな須恵器(すえぎ)の壺(つぼ)がみつかりました。

ほかにどのような土器があるのか。土器の接合をしていくことで、新たなものがわかりましたら、次号以降にご紹介したいと思います。

今年度の高住平田遺跡の現場調査は、11月末で無事終了いたしました。

これもひとえに夏の暑さや、最近の急な冷え込みにも負けず、毎日がんばっていただいた作業員のみなさんのおかげ。感謝の気持ちでいっぱいです。

今後、現場でつくった図面やみつかった遺物から、より詳しく、この地でくらしていた人々のようすを調べていきます。

